
お兄様 薔薇をください

nishi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄様 薔薇をください

【Nコード】

N5530F

【作者名】

nishi

【あらすじ】

幼い頃、お兄様に薔薇をねだった。お兄様の持つ薔薇が一番美しく見えたから。薔薇を欲しがるとはいつの間にか薔薇姫と呼ばれるようになった。わたくしは何よりもあの薔薇が欲しい。

0・記憶

お兄様に薔薇をねだった一番初めの記憶は。

夜会に行くお兄様が用意させた薔薇が、お部屋のお花よりきれいに見えたから。

お食事のために階下へ降りようとしていたとき。

おでかけされるお兄様を見つけてしまって、お兄様遊んでくれなきゃ嫌よって

本当はいうつもりだったのに。

お兄様の後ろに薔薇をもって佇むつヴァレットを見たとき。

「お兄様、わたくしにその薔薇をください」

すべり出た言葉がかわっていた。

大玄関を今まさに出ていこうとしていたお兄様は振り返り。

首を傾けて少し微笑むと、ブーケを自ら持ち、早足で傍まで歩いて
跪き

「どうぞ、お姫様」

にこりと差し出してくれた薔薇を無邪気にお部屋に飾ってもらった。

それから、夜会に行くお兄様にたびたび薔薇をねだるようになって。

いつだって、微笑んで差し出してくれた薔薇のブーケ。

いつからか二つのブーケが用意されていて。

お兄様はわたくしを薔薇姫と呼んでいつも笑ってくださるようになった。

お父様もわたくしに薔薇をくださるようになった。

でも、お兄様。

二つ用意された薔薇。

わたくしが欲しいのは。わたくしのために用意された薔薇だけじゃなくて。

その、二つの薔薇が欲しいの。

わたくしが、夜会に初めて出る時

用意されたしきたり通りの白い国花を一輪だけ抜き取り身に纏い

エスコートしてくださるお兄様に微笑んだ

「お兄様。わたくしに薔薇をくださいな」

わたくしは薔薇姫なのだから。

1・庭園の茶会

燦然と降り注ぐ朝陽が庭を明るく染め上げている。
鳥のさえずり、花の揺らめき、緩やかな時間で人を癒す庭園は、今は一人の少女のために存在する。

『薔薇姫』

名は体をあらわすように。

幼いころから呼ばれ続けた名に恥じることはない成長をみせた今。

庭を眺めて微笑むその姿は、愛らしさより

まるで花を従え君臨しているかのような錯覚さえ起こしそうな艶やかな気品を纏っている

うつとりと庭を見入る少女の視界に、見覚えのある姿が映り込む。

「？」

瞬きして、もう一度その姿を捉えると、驚いたように瞳が開かれた。

庭に面した回廊を、背筋をただし、大きな足取りで歩いて行く姿。

「…お兄様？」

風がその声を届けたはずもないのに。

呟いた瞬間、一瞬、兄が視線を上げたように感じたのは。

きっと、そうであってほしいと思う少女の願望。

「こんな時間に、お兄様どうなさったのかしら」

貴族の跡取りとして、領地を治める父の仕事を補佐する以上に、騎士として王城に詰める日の比重が多くなっていく兄が家にいることは珍しく。

首を傾げて、考える。

一日屋敷にいるならば、一緒にお茶をしてくださるかしら。甘えたい気持ちや首をもたげるが、その気持ちを抑えるように緩やかに頭を振ると、届くはずのない言葉を小さく囁いた。

「お兄様。おはようございます。」

微笑んで姿のなくなった回廊から目を離れた。

1・庭園の茶会

忙しない中見つけてしまった。

薔薇姫と呼んで愛してやまない妹がこちらを見つめる気配を。

視線があつたわけではないが。一途にこちらを伺う様子は手に取るようにわかる。

きつと、かまってほしくてたまらないのに、その一言をいえずにいる妹。

目が合うと、子供の表情をすっと隠し消して、いつの間にか覚えたのか、大人の目をして微笑む様がたまらなく切ない。

こちらが気づいていないと思うと、昔と変わらない全幅の信頼と敬愛を寄せる瞳。

守ってやりたい、幸せにしてやりたい、と自然湧き起るやわらかな気持ち。

優しさをなくさなかったのは、妹の存在が大きい。

その妹が、可愛い我がママを口にすると叶えてやらないわけがない。

少し前の薔薇姫なら。

『お兄様、遊んで下さらないと拗ねてしまいますわ』

庭に続く階段を駆け降りて、優雅に礼をして。

仔猫のようきらきらした瞳で見上げて、そう言っに違いなかった。

そんな気持ちを隠すようになったのは。

この間、だしてしまった夜会が悪いのだと。

ぎりと奥歯を噛みしめる。

「跡取様。」

自覚を促すかのような執事の呼び声に、一瞬小さく眉が動いた

「朝のお茶はおとりになってもよろしいですが、お昼の時間はおとりできませんね」

「……？」

呆けたように振り返り、言葉を探した。

普段から厳しい顔をより一層しかめて佇む執事をまじまじと見つめる。

「何かついておりますか。」

口元が緩んだ。薔薇姫に甘いのは何も自分だけではない。

『お兄様。お兄様っ』

さらりと捲った頁、記憶のどこかで妹の声がした。

書物に落とされた視線はそのまま、唇の端が僅かに緩むと、静かにまた頁をくる。

伸ばした指先がティーカップの柄を探して、石細工の机の上を彷徨う。

『お兄様』

日々、仕事に追われて、最近声など聞いていやしない。

探し当てたカップを持ち上げ、唇に寄せる。

視線は本の先を辿る一方、意識のどこかが、違和感を訴える。

…ルー様

「ルー様」

はつきりした実音で呼びかけられ。ふと顔を上げる。

間近で、苦笑したように長年仕える侍女が声をかけた。

「姫様がお呼びでございますわ」

茶器を戻すと、茶器の触れ合う小さな音が生じる。

没頭していた「各国情報経済論」を閉じて、あきれたよう表紙をなで深く息を吐いた。

「お茶の時までこのような無粋なものを持ち込んでしまうとは」

自分に苦笑して、一面の花を揺らしてかけてくる少女の姿を探す。

「お兄様。お茶は召し上がりましたの」

幻聴だと思つた柔らかな声音が耳に飛び込み、薔薇色の頬の妹が東屋をのぞきこむ。

たくさんの花を抱え込み。ふんわりと笑う仕草は。つい先日夜会で披露目をしたことを

忘れさせるくらい。幼く愛らしいものだった。

「お兄様にお花を編んで頂きたくて。……お邪魔かしら。」

心配そうに首を傾げるその愛らしい仕草と瞳に、目を細めて微笑むと。

ゆつくりと石細工の机に本を置き、おいで、と呼びかける。

「まあ、薔薇姫様。」

小さなさざめきが。庭園に控える侍女の間におこる。

咎める色はないものの。侍女の小さな困惑がルーに伝わった。

「かまわないよ。だれも言わなければね」小さく伝えたと、了承した気配が返る。

余計な不安を妹にも侍女にも与えまいと侍女を遠くへ下がらせた。

差し出された花から、抜き取った一輪の薔薇を指先でくるりと回転させる。

『花を編むのは女子供のことだ』

あの頭の固い当主は、騎士にあらざる行為を認めない。

手にした薔薇に口づけて。彼女の髪にさし、笑みを浮かべた。

「お兄様、騎士様ね」

微笑む妹の頬にも口づけすると。残りの花を受け取る。

「そうだね」

きつちりと襟元まで制服を着こんだ姿。

休日ですら息を抜く要素が一つも見られないルーは、
年の離れた妹の遊び相手を勤める、今この時ももちろん帯剣を解かない

騎士の鏡と国外にまで轟く彼の二つ名を、「光の騎士」という。

美しさ崇高さ規律正しさを讃えられ広まったその名と

細身のすらりとしたその体格と、母譲りの端整な顔立ちの絵姿が
国中どころか、諸外国にも出回っていることなど知る由もない妹は。

騎士に似合わぬ、乙女の遊びで兄を独占する。

嫌がる節もなく、摘んだ花を拾い上げていくルーの姿にも違和感はない。

骨ばった指先は、器用にも花を編み出す才にも秀でて、
いくつもの飾りを作り出し、髪に首に手首に、そして服にと花をあしらって妹を飾り立てた。

「お兄様と、またお茶ができますように」

ガーベラを又一輪編み込む妹が、内緒のように花に囁いた。

目を細めて、笑った。なんて愛しい。

ルーも願いを込めて、花を編む。

いつまでも、愛らしい乙女であるように。

人はいつ、大人になるのだろう。

知らず知らずのうちに、成長し。やるせなくなる。

部屋を訪ね庭でお茶を一緒にどうだろうと、声をかけた瞬間、破顔した。

素直に遊んでほしいとねだればよいのに遠慮した妹をしり、苦笑した。

かなうならば。

優しい世界に閉じ込め、世の中の醜悪なものから目隠して、美しいものだけを見せ、

きつとそうして、隔離する。

夜会に連れ出した日、信頼できる人間が集う小さな夜会を選んだにも関わらず

片時も離れず、始終周りを威嚇した時のように。

見守る兄の視線の中で、いとけなく微笑む薔薇姫。

いつか、この気持ちを見知らずの男に託すことができるのだろうか。

最後の花をつなぎ止めたたルーの前に、白い小さな手が差し出される。

「お兄様、薔薇の焼き菓子でしてよ。」

甘い花の香りの中に、差し出された焼き菓子の香りが混じる。

その焼き菓子を受け止め用とした手がとつさに腰の剣へと伸び、振り返る

『異質なもの』

油断を悔やまないはずがない。

表情を失った彼の傍に悠然と佇む人影

「やあ。」

穏やかに、声はかけられた。

1・庭園の茶会（後書き）

…一度書いたものを消してしまいました。
だいぶ違う話になりましたが。とりあえず、一話目。

2・招かれざる貴人

「その子が。噂の、君の薔薇姫かい」

「デイー…」

腰に佩いた剣に伸ばしかけた手は宙に浮き、相手の名前とともに小さな息を吐く。

きゅっと、空をきつく握りこんだ指をゆっくりと下ろした。

「どうして…あなたが」

相手を非難する色を隠せない金色の双眸は一度伏せられ、ぎりつと奥歯を噛みしめる音が響く。

周りを見渡した。

花々に隠れ、姿の見えない侍女。

見下ろすと、妹が一切の表情を消して見上げている。

優しく笑みを浮かべ、頭をなでてやると幾分和らいだ表情はついと闖入者へ向けられた。

“これは…、確実に自分の失態だな”

小さくため息をつくとき、
実はよく知っ闖入者になるべく不快の色を消し去るよう努めて、
相対する。

「デイー。この閉じられた花苑が…当家にとって、どのような位置づけかご存知のはず。

あなただから、誰もお止めしなかったのでしょうか…」

呼ばれた彼は、どこか無機質なその声音を気にする様子もなく、あたりを尊大に見回すと、軽く頭を振り嘆息した。

「『枯れない花』『永遠の春』『侯爵家の永遠の繁栄』……か。」
諳んじて、僅かに高い視線がルーの上に落ちる。

「そうだな。ここが、お前の大事な家を賛美する庭だと認識しているが。それがなんだ」

侯爵家に対する暴言に、ルーが片眉をあげる。

「なあ、ルー。俺は理解できないな。

お前が『守りたい』と思う価値を、この庭のどこに見出せばいい？
花なんて、空腹の足しにもならないければ。武器にもならないこんなもののために。」

……お前が時間を割いていることを残念に思うよ。」

何気なく話す間にもブーツの踵は可憐な草花を踏みにじり、目の前で芳香を放つ花を払いのけると。くしゃり、手近の花を摘み取り、掌で散らせた。

零れる花びらを無感情な青い目が行方を見定めるように見遣った。

踏みつぶした花の上で見下すその姿、それがかつての記憶を呼び起した。

『花が侯爵家の繁栄の印なら。潰してしまえばいい。』

何のためらいもなく、高慢に言い放った言葉。彼だから許される言葉。

かつての彼が、変わらずに今と重なった。

「ルー」

いつの間にかあげられた、青い視線が逃れることを許さないように捉える。

『ルー』

今も昔も変わらず、まっすぐに響く声。

「お前が継ぐ必要なんてないだろう。」

『ルー。…お前が、継ぐ必要なんてないだろう』

幾度その言葉が繰り返されただろう。

あの時も、ディーだけがそう言って、重圧から解放してくれようとした。

それを、振り切ったのもまた自分だ。息を整えるように静かに瞼を閉じる。

あのときも、軟弱な自分は眩暈につぶされそうだった。

優しくルーを追いつめるも、望む反応を得られないことに嘆息して、視線を落とした先に仰ぎ見る少女を見つける。細い眉が僅かに動き、瞳が歪められた。

「君も、そう思わないか花神侯爵の隠し姫」

青い瞳が、厭われる意味も知らない少女を責める。

戸惑ったように一瞬感情の色が走った兄と同じ金色の瞳は
こらえるように落ちつきを取り戻し瞬きすることなく、沈黙を返す。
口元には微笑も困惑も何も映さない。
ただ、人形のように金の髪と飾られた花々が僅かな柔らかな風に揺
れるだけ。

2・招かれざる貴人

侯爵家歴代当主が守り続ける花苑は四季を問わず、花であふれかえ
る。

それが常春の館と羨まれる由縁で、当主にのみ口伝されるという技
術は

王ですら知ることはない。

”花神の侯爵”

華やかな一族の頂点に立つ当主は歴代その異名を継承する。

次期当主として、闖入者を排除し閉ざされた空間を取り戻すべく
ルーは、溜息をつき動き出した。

「デュー。」

排除すべき彼は、最愛の妹と視線を合わせはずすことなく、牽制し合うかのように一步も譲らない深い沈黙。

「妹を巻き込まないでくれ。」

間に割って入り、背中に少女を隠す。

「……そもそも、なぜあなたがここにおられる。」

閉じられた庭園ということ以上に。

前の人物が予告なしに屋敷を訪ねてくることなど、ありえない。

「お前が、城にこないからだろう。」

さも、あたりまえのように答えが返る。わずかにルーの眉が跳ねた。

「私が剣を捧げたのは、殿下の妹君であるブランカ王女殿下であつて。」

あなたに、ディーに仕えているつもりはないが」

身分の差はあれど、億するような間柄ではない。

「言っじゃないか。」

皮肉気に晒い、さらりと髪をかきあげる。

思案するように首を傾け、ルーを眺め。許してやるとでも言っように、仕方なさそうに笑う

「まあ、いい。」

何を思ったか、綺麗に表情を洗い消し。

王族のお手本のような微笑を浮かべて、つかつかとルーに歩み寄り、背後の薔薇姫をのぞき込む。

「姫君、失礼致しました」

優しい微笑と一部の隙もない所作。

王子の悪癖を思い出し、ルーが渋面をつくる。

それが内心たまらなく楽しいのを、隠して。

また、一変する。ほんの一時の間にさらけ出したすべての表情が嘘のように、

快活な笑顔で振り返る。

「お前がかまけてる、薔薇姫の顔をみようと思ってね。夜会に出したらいいじゃないか。連れてくるというのなら、私もその夜会に行ったのに」

だからこそ日も人も選んだのに、誰に聞いたんだか。

と、小さなつぶやきを拾ってしまう。

さらに楽しげに笑い、ずっと視線を落とし眺める。

「自慢の薔薇姫は、長毛種の子猫かい？まるで、血統種だな。」

観察するつもりが、臆することなく見上げる少女から逆に視線を逸らせなくなると

困ったように微笑み強引に振り切る。

その様を見て、ルーは溜息をつく。

「薔薇姫。すまない。また今度、お茶をしよう。」

「お兄様…」

少し、考えるように小首を傾げると淡く笑んだ。

ひたりと、金色の目はディーを捕え

「殿下」

柔らかな声が、射抜く。

「……突然…のことはいえ、拝謁の機会を賜り大変光栄に存じます。」

薔薇色の唇が、優しく無邪気に言葉を紡ぐ。

続く台詞も、愛らしい好奇心が仄かに見え隠れしつつ。

ふと、何かが癪に障ったようにディーは無邪気なその顔を見下ろした。

見極めるように向き直る。

慇懃無礼という言葉をぴったりとあてはめられるほど殊更丁寧に完璧に仕上げられた、礼作法。

そのさまが、愛らしくて仕方がないと緩むルーとは。

別の回路が働く。これは……。確信する。

孕んだ棘。王族たる自分が日常茶飯事のそれに気付かないはずがない。

売られた喧嘩は買ってやる。傲然と笑う。

第一位王位継承者でありながら

私事においては、感情の起伏を抑えようとしない迷惑な男。

彼にとって、親友の妹であることも。

薔薇姫と呼ばれ大切に傳かれて育てられた少女であることも、どうでもいいことで。

この出会いが、薔薇姫と呼ばれる少女を変えていく。

そう、出会いは最悪だった。お互いに。

2・招かれざる貴人（後書き）

…。視点が定まらずすみません。四苦八苦しています。

まず、第一に、名前が決められず。書きにくくて仕方ありませんw
いつまでたっても、薔薇姫って。。。

ルーとかディーとか。思いつかず適当です。

もっと、人出したいのですが。さらに名前に困りそうですね。

そのうち、考えたら修正しようとか。思ったり思わなかったり、ら
じばんだり。。。あー。

拙い文章にお付き合いいただきありがとうございます。
すみません。

3・招待状

不穏な雲行きを察知し、間に入った。

大切に育ててきた妹を、

友人だろうと王族だろうと、軽々しく合わせるのは不本意だ。

「さあ薔薇姫。

私は殿下とお話があるので。先にお部屋に戻っておいで。」

抱きしめて耳元に囁くと心配そうな眼に見上げる瞳が、
ちらりと王子をうかがい、小さな溜息をついた。

視線を合わすために屈んだルーの頬にそっと唇を押し当て。

わずかに逡巡した後、瞳を伏せて内緒話をするように、兄の耳元に
再び唇を寄せる

「お兄様、人にも好き嫌いってあるのかしら」

小さくつぶやくのを耳に入れ。思わず笑みをこぼした。

会話の内容も聞こえてないデューは興味深げに二人を眺めている。
妹のブランカも美姫として自慢できるが、前にいる二人は別格だろ
う。

ルーの顔も普段見慣れていなければ、呆けること間違いない。

花苑にあつて、いつそう華やぐ美貌。

二人して天女のようなと言ったらルーは間違いなく、

顔に似合わない悪態とともに剣をまっすぐこちらに向けるだろうが。

薔薇姫は優美に一礼をして去っていった。

金色の瞳が去り際にこちらを一瞥し、侍女に傳かれ屋敷の方へ戻っていくのを

見送ると花の中に舞い戻る妖精かのような錯覚を覚えた。

「…人か？」

子供の足取りを心配するかのように、いつまでも見送るルーを振り返ると。優しい表情を珍しく無防備にさらけ出していた。あまり見ることにないその表情にディーは目を見張る。

そういえば、いつ間にか作り物の表情しか目にしなくなっていた。そして、そういうものだとも自分も勘違いをしていた。

妹にに向ける顔が、今や外では一切見られることのない。

笑顔だと知らないのは、甘やかされている本人ばかりだろうな。苦笑した

3・招待状

「あなた」

妻のたしなめる声音をに耳を貸さず、

一通の招待状を薔薇姫に渡すよう執事に指示する。

「お父様、これは？」

見上げる金色の瞳に、小さく頷く。

愛してやまない娘を夜会に出さなければならぬ苦しみも、
茶会に出さなければならぬ悲しみも、

……嫁に出すよりかはどれだけましか。

他所へ嫁にやるなどもつてのほか、
その点は後継者指名したルーと数少ない一致した意見だったりする。

「王女殿下のお茶会だ。失礼のないように」

夜会にだすべきではなかったと、この招待状を見たときに正直溜息
をついたものだった。
たいていのものは威丈高く断っていたが、王家直々の招待状にはだ
いぶ頭を悩ませた。

最後まで反対していた侯爵夫人も、夫の決断に諦めたように

「ブランカ王女殿下の茶会でしたら、あの子が控えているから心配
ないかしら」

と、おっとり呟いた。

ただ、宮廷のようや駆け引きの多い所に出すつもりはなく、外の世界を教えていないことが悔やまれる。

「まあ、王女殿下の茶会。お兄様もいらっしゃいますのね」

無邪気に微笑む娘に、夫妻も僅かに顔を緩ませた。

3・招待状（後書き）

話、あまり進んでいませんorz

年末から忙しくて…、急遽降ってわいた時間が。

インフルエンザの猛威にダウンした、特別休暇。

熱あると頭が働かないものです。皆様もお気をつけて。。。。

4・主女の茶会（前書き）

以前投稿した分も割と修正しています。すみません。

4・王女の茶会

「あら、一目でわかるわね。ルーに似て美人になったこと」

向こうからは見えないことを利用して、庭を見下ろし目当ての少女を探し出した。

庭を見下ろす窓の傍に椅子を置く王女ブランカの視線の先には

ルーとよく似た天使のような美少女。

陽光に燦然と煌めく金色の髪に、陶磁器の肌に薔薇色の頬と唇、金の睫毛に彩られ一段と輝かしいはずの瞳は控えめに視線を落としている。

「ルーの心配も、わからないわけじゃないわ」

夜会に出すのも、茶会に連れ出すのも。

渋っていたことを、思いだしてくすくす笑う。

「姫様」

呆れたように、長年仕える侍女長が呼びかける。

なあにと無邪気に返し、ついでとばかりに有無を言わせない微笑を浮かべると

また窓の外へ視線を送る。

「でも本当に愛らしいわ。」

美しい女性を見て、美しいと手放して称賛できるくらい的人格はある。

でも、

「あんまり、可愛いと。いじめたくなるのよねえ」

扇子が気持ちよく音をたてる。

美人で聡明な王女が開く茶会は気持ちの良いものでなくてはならない。

「姫様」

「なあに。」

「悪戯が過ぎますと、ルー様に嫌われますわよ」

「やあね、ルーが私を嫌うはずないじゃない。」

高慢に聞こえる台詞を明るく堂々と言ってのけると、すくっと立ち上がる。

では、名に恥じない振る舞いを。

お目付け役が送り出すきつい言葉に、
華やいだ笑い声を残して茶会へと消えていく。

入口の外にきつと、ルーが控えていたのだろう。扉が閉められる
わずかの間に。

からかう様な笑い声と、静かなテンポで諫めるルーの言葉が聞こえてきた。

少し疲れたように、侍女長イレールは窓によると階下を見下ろした

「あの子が侯爵家の薔薇姫。よく似て…、美しくおなりだこと…。
…様があのままお育ちになり、並んだらさぞかし…」

イレールは軽く頭を振ると、部屋を片付けるために侍女に指示を出した。

4・王女の茶会

「あなた、見ないお顔ね。どちらのお家の方かしら。」

通常であれば脇に控える侍女も、王家の茶会ではその場に控えることすら許されない。

外の茶会に出るのも初めてなら、同じ年頃の少女の中に放り出されるのも初めての彼女は
あまり友好的に聞こえなかったその言葉を受け僅かに首を傾けた。

王女の茶会に呼ばれるのは貴族の中でも名のある家の者ばかり
お互いにある程度の面識があり、ただでさえ足の引っ張り合いのこの世界において
見知らぬ顔は今の勢力を壊す不穏分子と判断されかねない。

全ての目がそちらへ集まる

「わたくしは…」

よく通る声が遮った

「あら、わたくしの茶会で騒ぐのはだあれ。わたくしのお客様でしてよ」

「ブランカさま！」

茶会の主人に誰もが慌てて居住まいをただす。

「ごきげんよう。みなさま。」

場の中心が一瞬にしてうつり、華やいだ挨拶の中、席に勧められるままにそれぞれがおさまる。

そのなかで、ひとりが、我慢できないように。薔薇姫をふりかえる。

王女殿下に挨拶する時も、家名を名乗らなかった少女に対する興味が全体に広がっていた。

「ところで、この方は…」

「お見かけしたことない方ですわ」

別の少女も好奇心を抑えられないように、たたみかける。

軽く頷くと、王女は優しい笑みで薔薇姫を見つめる。

「そうね。ごく最近社交界に初めて出たばかりでしたわね？」

はいと愛らしい声が響くのを聞くと。

誰しも顔を見合わせた。

「最近？まあ、でもお城でお会いした覚えはございませんわ」

「ああ、お城ではないのよ。まだお城の夜会には来ていなかったわね」

「はい。」

薔薇姫はおっとり頷く。

「あら、それじゃあ。だれも知りませんわねえ」

「最近のお披露目と言えば子爵家のナーシャぐらいしか聞かないわね」

格下のレッテルが張られたことすら気付かない彼女を置き話が進む。

「まあ、どうしてこちらに？」

怪訝そうに一人が訪ねた。

「それは。殿下がぜひにと、おっしゃるんですもの。私もお会いしてみたかったのでお招きしたのよ。」

「殿下が？」

動揺と邪推が隠された声に、王女は柔らかく頷く。

「そういえば、どちらのお家の方ですの」

誰もが、聞きたかった質問がようやく発せられ、息をのむように静まり返った。

「それは……」

一瞬言葉を切り、笑顔で王女は言い切った。

「内緒ですよ。」

「ブランカさま、なぜですか？」

冗談めかした声は、緊張を隠しきれない。

ブランカは、明るく笑う。

「殿下から言われてますし、連れて来て下さった方にもお家の名前を出さないようにと

重々言われるんですもの。わたくしからは、言えないわ」

どこかの一族が、後見人にたつのではないかしら。

さざめくように小さな声がいききする。

「殿下とはサロンで出会いに？」

「さあ、殿下もいろんなところにお顔を出してるみたいですし。

まあ、後からいらっしゃるかもしれませんし。この話題はここまでね。」

誰もが、雰囲気壊さぬように笑いながら。
水面下で、思考を巡らせていた。

ただひとり、愉快気に笑うブランカ王女と
状況をとらえ切れてない薔薇姫を残して。

4・主女の茶会（後書き）

久しぶりに書きました。
表現するって難しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530f/>

お兄様 薔薇をください

2011年10月5日17時14分発行